群教セ	G02 － 01
	平25.251集
	小・国

優れた叙述に気付き、想像を広げて読む力を伸ばす国語科指導の工夫

― 読み取りの観点を活用した自力読みと学び合いの活動の工夫を通して ―

特別研修員　　堀江　利恵子

Ⅰ　主題設定の理由

平成24年度の全国学力・学習状況調査結果分析による県内の児童の課題として国語科では、「場面の気持ちを想像した音読」「表現の効果を考えて創作すること」「表現の仕方や特徴をとらえること」「情報を結び付け、自分の考えを書くこと」などが挙げられる。勤務校の児童においては、一つ一つの言葉をもとにした想像を楽しむことはできる。しかし、言葉を関係付けながら、情景や登場人物の心情の変化などを的確にとらえて想像を深めたり、作者の思いを想像したりして、自分の考えをまとめていくことには課題がみられる。

以上のことから、本研究では、「はばたく群馬の指導プラン」の国語科の課題の一つである「文章の特徴や表現の仕方について考えること」に基づく「優れた叙述に気付き、想像を広げることができる」力の育成に取り組むこととした。

Ⅱ　研究内容

１　研究構想図

目指す児童像　◎文章によって、様々な優れた叙述があることに気付き、自ら言葉について疑問や課題をもちながら、人物に同化したり、情景や人物の心情を思い浮かべたりして想像を広げられる児童

実践１：優れた叙述から人物の心情や場面の様子を想像することができる。
様子が伝わるようにくふうして音読しよう　「競走」

実践２：優れた叙述から人物の生き方を想像し、考えることができる。
人物の生き方について考えよう「洪庵のたいまつ」

実践３：優れた叙述を味わい人物の思いや考えに気付くことができる。
優れた描写を味わおう「大造じいさんとガン」

授業改善に向けた手だて
手だて①読み取りの観点を活用した自力読みの活動の設定
手だて②読み取りの観点を活用した学び合いの設定

２　授業改善に向けた手だて

(1)　手だて①　読み取りの観点を活用した自力読みの活動の設定について

読み取りの観点を単元で身に付けたい力やねらい、教材の特性に応じて、選択、配列し、児童に合うように適切に課題化して学習活動を進める。実践１では、読後感とそれを生み出す叙述、せりふ化を主な読み取りの観点として音読劇で表し、実践２では、題名、一番響く言葉、作者の思いを主な観点として読み取りリーフレットにまとめた。実践３では、構成、人物像、相互関係、情景と心情などを観点として読み取りカード形式でまとめ読み合う活動を行った。

読後感とそれを生み出す叙述、せりふ化、
構成（あらすじ、場面構成、山場）
心情変化（人物の言動）、人物像、
人物の相互関係、情景と心情
題名、作者の思い（主題）、一番響く言葉、
自分の考え

これらについて読みの課題を設定し、叙述の根拠をもとに考えまとめていく。

図１　読み取りの観点（学習活動の課題）の例

読み取りの観点に基づいて手引きも活用しながら自力で読み取ったことをノートやワークシートに書きまとめる。

国語自力学習の手引き

言葉を大切にして、想像を働かせて読み考え深めよう

◎自力学習の進め方

（１）文節に区切り、一つ一つの言葉を意識する。

（２）書き込みをする言葉にサイドラインを引く。

（３）①（言葉の種類の確認）、②（何を考えるか、自問の観点を決める）

③（自分の考えを書く）

◎考え方の例

①言葉の種類

（動）動詞
（副）副詞
（名）名詞
（形）形容詞
（形動）形容動詞
（助）助詞

（言葉の働きから）
（心）気持ち（心情）を表す言葉
（表）表情
（会）会話文
（情）情景
（色）色彩語
（音）擬音語
（様）擬態語
（程）ものの程度
（出）出ゆ（～のような）
（書）書き方、文末、語尾

②何を考えるか、自問の観点

（思）どんな感じ
（イ）どんなイメージ
（なぜ）なぜそうしたか、なぜそうなのか
（気）どんな気持ちでそうしたか
（使）どんな時使う言葉か
（自）自分だったどうしたか、どう思ったか
（性格）人物の性格からするとどう思ったか
（予）たぶん、もしかしたら、きっと
（心内語）心のつぶやき
（せりふ）気持ちをせりふにすると
（文末）どんな心情や性格が分かるか
（違い）他の言い方や他の言葉との違い
（対出）前後の言葉や場面と比べて分かること
（重ね合わせ）言葉や文、場面同士を重ね合わせて考えると・・と分かる
（自・考）自分の考えを自由に考えると
（込）込められていることや思い
（意味）言葉の意味

図２　自力読みの手引き（一部抜粋）

(2)　手だて②　読み取りの観点を活用した学び合いの設定について

各時間、読み取りの観点を基にした学習課題に沿った学び合い活動に取り組ませた。中心となる叙述を明確にして、語句の関連に着目できるよう留意した。小集団から学級全体への学び合いを基本とし、小集団での学び合いに重点を置いた。発言の際には、話合いの手引きも年間を通して活用させた。その中で、発言の仕方を活用し合えるように助言や支援をして、学び合いの効果を得られるようにした。（図３）

○　・・さんと考えが同じです。（違います。）・・という言葉から・・という心情が想像できます。

○　・・さんと考えが違います（反対です）。・・という言葉からは、・・ということが分かるので、そのような心情にはならないと思います。私は、・・と思います。

○　・・さんの考えは・・の所は確かにそうですが、前の叙述の・・という言葉や・・という言葉とも重ね合わせて考えると、・・という心情の方が合っていると思います。どうですか。

○　登場人物の・・という心情はみな共通していますね。他に・・という言葉や・・という言葉からも・・という心情が表れていると気付き合えましたね。

図３　話合いの手引きからの抜粋

Ⅲ　研究のまとめ

１　成果

○　手だて１により、各時間、読み取りの観点を基にして課題設定を行うことで、着目すべき中心となる語句や優れた叙述を選び出すことができた。それらをノートやワークシートに書き出して、自問したり人物に同化したりして想像や考えを広げ、課題について自分の考えをまとめられるようになった。

○　手だて２により、叙述の根拠と考えの理由を提示するような発言の仕方を継続することで、読み取りのずれを児童相互で気付き合えたり、同様の想像でも多様な言葉で表現できることに気付き合えたりして、それらをまとめる過程で想像や考えを広げることができた。

○　上記の二つの手だてにより、学び合い後の自力のまとめにおいて、優れた叙述の意味や効果の理解、それを基にした想像や思考の深まりを見取ることができた。よって、上記の手だては有効であったと考える。

２　課題

○　自力読みや学び合いの際、指導者の個別指導や助言が過度にならないように留意する工夫をすることで、１単位時間の各過程を通して児童相互の活動により根拠を明らかにしながら考えを徐々に広げ、まとめる力を伸ばすことにつながるので、さらに取り組んでいきたい。

３　想像を広げて読む力の育成に向けて

○　文章の特徴にあった読み取りの観点を選び、中心課題を精選して、自力読み、学び合いを相互に関連させ合うことで、想像や考えを確かにしながら読み広げていく力が高められると考える。

Ⅳ　実践及び改善の実際

実践２

１　単元名　「人物の生き方について考えよう『洪庵のたいまつ』」（第５学年・２学期）

２　本単元及び本時について

本単元は、「登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめる力」（「読むこと」の指導事項エ）を身に付けさせるものである。読み取りの観点に沿って優れた叙述をとらえ、言葉に対する想像を広げることで、考えを確かにすることをねらいとする。本単元においては、「伝記（医師・緒方洪庵）を読み、自分の心に響く人物の生き方について考えたことをリーフレットで伝えよう」という単元を貫く言語活動を設定した。本時は全８時間計画の第４時に当たり、題名に込められた意味について深く関連する叙述に着目して読み、学び合いを通して作者の思いについて自分の考えをまとめることがねらいとなる。様々な意味深い言葉を出し合いながら想像し考えを広げ、作者の深い思いが確かに題名に集約されていくことにも気付けるよう、本時の研究上の手だてを次のように具現化した。

３　授業の実際

学習計画のもと、前時は洪庵の心情から人物の考え方を探ったので、本時は以下の学習課題を解決し、考えをまとめることを確認した。（**太字が本時の読み取りの観点**）

［**学習課題**］『洪庵のたいまつ』という**題名**に込められた意味を考え、**作者の思い**を探ろう。

「たいまつ」の一般的意味を確認後、自力読みに入る。叙述に着目し自力読みの手引きも使いながら、想像したり考えたりして、ワークシートに書く場面　**手だて①**

読み取りの観点に沿って叙述をとらえ自問自答し考えている様子

T：「たいまつ」という言葉を手がかりに、それに関連する語句や文を捜し、そこについて考えたことをつなげてみましょう。（以下ワークシートより抜粋）

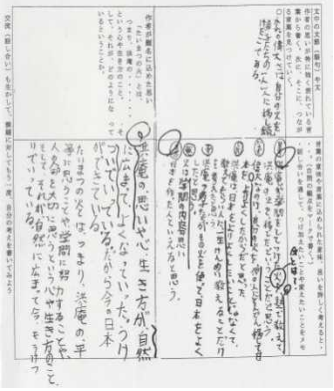

図４　児童のワークシート

授業前半の全体学習と自力読みから、緒方洪庵という人の考え方や生き方が「たいまつの火」であるということに付き、まとめられている。「火の群れ」が「近代を照らす大な明かりになった」という叙述までをつなぎ、最後の一文「世のわたしたちは、洪庵に感謝しなければならない」にはどんな強い思いが込められているか考えられるようにするこは、自力読みでは難しい児童もいた。

後半で少人数での学び合いを行うことにより、自分の考だけでなく友達の着目した叙述や考えを比べる過程で自分の着目した叙述がより意味の大きい言葉につながっていることに気付き始めることができた。さらに、全体学習で発言聞き合い、個人でまとめる際に想像や考えを広げている姿も見られた。

たいまつ・・暗やみの中の道しるべともなる火。
命を守る。
何人もでかかげ道を示す。
「暗い箱の中」、「弟子たちへのいましめ」
「自分の火」、「火の群れ」

洪庵の生き方
火・・大事な考え方・・身分に関係なく親切
人のためつくす
教えた学問や生き方が、他の人につながっている。

作者の人物に対する思いはどうのようだろうか。

図５　板書で比較しやすくする（１部抜粋）

自力読みの後、少人数で課題について学び合う様子　　手だて②

Ｔ：「たいまつ」と洪庵の生き方はどのように重なり合い、そこから洪庵に対する作者のどんな思いが分かるでしょうか。

Ｓ１：作者は、「かれの偉大さは自分の火を弟子たち一人一人に移し続けたことである」といっている所から、**なぜ、そう思ったのか**考えました。身分に関係なく塾生を教えた洪庵の人の命は平等だという考えとつながるからだと思います。それを偉大だと感じているのだと思います。

Ｓ２：同じ文からと「火の群れ」という言葉から**考えを加えて**洪庵の教えがたいまつの火なら、弟子たちに聖火リレーみたいに洪庵の**心が広がっていったということだと思います**。

Ｓ３：「弟子たちの火は後にそれぞれの分野であかあかとかがやいた」という言葉からイメージで考えたら、弟子たちがそれぞれの職業できれいに光っている感じがしました。

Ｓ１：日本をよりよくしたという考えは、「近代を照らす大きな明かり」という言葉と**つながってきました**。「後世のわたしたちは、洪庵に感謝しなければならない」という作者の考えがよく分かってきました。

Ｓ1は、「偉大さ」「自分の火」「移し続けた」という語句の想像を基に、前述されている重要な叙述と関連付けて考えている。

Ｓ2は、Ｓ1の考えを受けて「火の群れ」という言葉からも想像を広げ伝えている。また、「たいまつ」の意味と「心」を重ね合わせてとらえている。

図６　学び合いの様子

Ｓ1は、Ｓ2とＳ3の発言を聞いて、初めの自力学習では書けなかった、最後の一文の意味について考えている。

手だて１、手だて２を通して、自力のまとめの過程で、右記のように課題に迫る変容がみられた（図７）。

傍線Ａから、Ｓ1が学び合いを通して、「たいまつ」からの想像を広げ、それにより作者の思いに共感できている姿を見取ることができる。

作者は、洪庵の生き方をなぜ美しいと言っているのか。

・たいまつは正しい道へ導くという意味を表すから作者は「洪庵のたいまつ」とつけたのだろう。

・洪庵は人のためや学問に努力すること、平等に人を思うという心や生き方をつらぬいた人。さらにその心がまるでたいまつの火のように弟子たちに広がっていった。洪庵の弟子たちは洪庵のように生きたいと思い、日本を動かす人物になっていった。（Ｓ２）

・洪庵の温かいやさしい心は弟子へ、そして今へ、これからにつながっているから。（Ｓ１）（傍線Ａ）

図７　児童の文章（一部抜粋）

４　考察

○　手だて１により、課題を意識して手がかりとなる叙述を探し、書き出して、自問の仕方を決め考えたことを書くことで、順序立てて考えをつなげ広げていく様子がみられた。

○　手だて２により、自力読みでは「江戸時代は身分差別がひどかったのに、みんなに平等に治療したり、勉強を教えたりして、他人のために生き続けたから」という記述のみだった児童が、話合いを通して、「ずっといろいろな人に洪庵の思いや考えが伝わっている」と書き加えまとめられていることなどから、着目する叙述は同じであるが、「たいまつの火」などの言葉と関連させて想像し、考えを広げていることが分かる。また、言葉のイメージからの想像を広げることで、作者の思いに気付き書きまとめられるまでになることがＳ1の児童の変容からも分かる。

○　以上二つの手だてにより、文章の特徴に合った読み取りの観点を活用して課題設定し学習活動を進めることで、児童自ら優れた叙述に着目しながら想像を広げ、人物に同化したり、作者の思いを読み取り共感することができた。このことにより、二つの手だては有効であったといえる。

実践３

１　**単元名**　「優れた描写を味わおう『大造じいさんとガン』」（第５学年・３学期）

２　本単元及び本時について

本単元は、「登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめる力」（「読むこと」の指導事項エ）を２学期の取組を受けて身に付けさせるものである。本単元においては、「大造じいさんとガンや椋鳩十の作品を読み、自分の読み深めた考えをカード形式の本でまとめ、読み合おう」という単元を貫く言語活動を設定した。本時は全10時間計画の第６時にあたり、登場人物の行動描写や心情を表す描写、人物の相互関係を観点として課題を設定し読み、話合いによる学び合いを通して主人公の思いに同化して自分の考えをまとめることがねらいとなる。残雪の行動描写について意味や様子をとらえることで大造じいさんの心情の変化がとらえられることに気付き、大造じいさんに同化しながら読み深めていけるよう本時の研究上の手だてを次のように具現化した。

３　授業の実際

学習計画のもと、前時までの大造じいさんの心情の強さを掲示物から確認し、本時は以下の学習課題を解決することを確認した。（**太字が本時の読み取りの観点**）

［**学習課題**］『大造じいさんは、何にどのように強く心を打たれ感動したのか、自分の考えをまとめよう』（**人物相互の関係、心情の変化**）

課題に沿って、課題解決の手がかりとなる叙述を選び、自問しながら自力読みを行う様子　手だて①

言葉	心情
T・残雪の行動を表す言葉から残雪の思いを想像することで、それを受けた大造じいさんの心情につなげて考えていきましょう。（児童S１のノートから）	
じゅうを下ろしてしまいました。	☆残雪の行動に感動したから（☆は変容前の自力読みの初めの状態）
人間もハヤブサも（中略）ただ、救わねばならぬ・・。	うたれても、けられても、仲間の命が助かればそれでいい
強く心を打たれて、力をふりしぼって	人間に勝てないかもしれないが、今ある力をせいっぱい出すぞ。
正面から頭領らしい・・堂々たる・いげん	立ち向かうんだ。

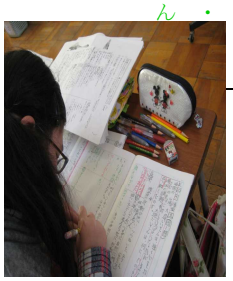

図８　自力読みの様子

自力読みの初めは「残雪の行動に感動したから」と短くまとめて書いているが、残雪の叙述を順に追いながら、残雪に同化する形で想像し自力読みの過程内で読み取りが深まっていることが分かる。

その後、少人数で考えを出し合う学び合い活動を行った。司会と記録、発表者を決め、課題についてまとめるようにしたことで相互の学び合いが深まった。

自力読みの後、少人数での学び合いの様子　手だて②

Ｔ：友達の考えと似ていることはまとめ、違うところは根拠の叙述や言葉をしっかり伝え合って、なぜ違うのか話し合いましょう。残雪の思いを考えられれば、大造じいさんの思いにつなげることができて、課題についてまとめられますね。

S1：人間に慣れてしまっていても仲間は仲間だから、絶対に助けてあげたい、という思いだったと思います。うたれてもけられても仲間が助かればそれでいい、という思いです。

S2：相手がだれであろうと立ち向かい助けるという思いもあったと思います。

Ｔ：大造じいさんが心を打たれたのはその場所の他にもありますね。

S3：自分の行動の自信があったのだと思います。
S4：自信があるというのは、仲間の命を助けるということにだと思います。
S1：だから、堂々としていたのかな。(①)
S2：死が近づいているからこそ落ち着けた、ということもあります。
S3：仲間が助かった、という安心もあるかな。
S4：命が大切という思いをつらぬいた。
S3：仲間を守るという思いをつらぬいたということが頭領らしい。
S1：正面からにらんだというのも頭領らしいと思いました。
S4：大造じいさんは、残雪が自分に問い掛けてくるような気がしたのだと感じました。(②)
T：課題を再度確認し、大造じいさんの言葉で課題についてまとめましょう。

図９　学び合いの様子

本時は、根拠の叙述は明確になっていたため想像や考えの交流が中心となった。また、読み取りのずれよりも発言を重ねていくことで考えが広がっていく学び合いの様子となった。少人数による学び合いの後、グループごとに考えを発表し学級全体で精査していった。課題についての考えをまとめるというめあてを意識しながら取り組めたことで、まとめの過程での個の学習も集中して行っていた。学習の初めの自力学習と学び合いを通した後の個のまとめにおいて次のような変容を見取ることができた。

○残雪は、一羽の仲間の命を守っていた。それにわしが手をさしのべたら、仲間を守れたからそれでいい、というように、弱そうなことをせず堂々として立ち向かってきた、そのことに感動した。(傍線A)

S1は、S3やS4の発言を受けてS1①のように叙述から考えている。まとめでは、「弱そうなことをしない」という自分の言葉と「堂々と」をつなげて書き加えている。(傍線A)

図10　各自によるまとめの過程の様子（S1のノート）

○自分よりも強くかなわない相手だろうと、命を一番大切に思って戦えるその自信に満ちた行動に、鳥とか人間とかではなく大切なことを教えられた。(傍線C)

S4は、上記S4②の発言をまとめの段階でさらに自力で考え直して、「問い掛けてくるような」という部分を傍線Cのように詳しく考え、書き表せている。

図11　各自によるまとめの過程の様子（S4のノート）

残雪の思いについて残雪の行動を表す叙述から想像するということを通して、そのことが大造じいさんの感じ取ったことであるとすることで、主人公に同化して考えをもつことができた。

４　考察

○　手だて１において、本場面を２時間扱いとし、前時に心情と関係する叙述を確認し合っておいたことで、本時はそれらの叙述についての考えを充分にもつことができた。考えを書きつなげていくことで手だて１における個人の中でも想像を深めていく姿を見取ることができた。

○　手だて２においては、読み取りの観点を基に課題設定を練ることやそれに応じたノート作りの指導によって、自力読みと学び合いを結び付けて確かに読む力を高められたといえる。また、実践３では、実践２までに話合いの手引きの活用が充分に行われていたため、互いの発言を聞き合って、自分の考えと比較したり、重ね合わせたりしながら根拠となる優れた叙述をつなげて、さらに想像や考えを広げたり確かにしたりできる姿が見られた。

○　まとめる過程での児童の様子（ノートの内容）から、心情の変化について叙述を基に想像し考えを的確に広げられたことが分かり、本研究の二つの手だてが有効であったと考察できる。